

後川内区で3地域合同の十五夜祭 子どもたちや地域住民が交流深める

9月28日、後川内区の新竹・小堀・辻ノ堂の3地域合同の十五夜祭が開催されました。かつては市内各地で行われた十五夜祭。3地域でも地域の子ども数が減り、合同の十五夜は今年で最後となりました。祭りでは、神事が行われた後、子どもたちによる綱引きや相撲を実施。大人はその様子を見守りながら、住民同士交流を深めました。



綱引きや土俵に使われた綱は地域住民によって編まれたもの。当日は子どもたちや保護者、地域住民など約100人が集まり、にぎやかな祭りとなりました

陰陽石まつりで住民ら交流を深める

9月22日、よろず生産の神を祭る祭典「こばやし陰陽石まつり」が陰陽石公園で開催されました。神事祭典では五穀豊穡を祈願。地元住民らが歌や踊りなどを披露したステージイベントのほか、魚のつかみどりなどが催され、多くの家族連れでにぎわいました。



赤い羽根共同募金運動がスタート

10月1日、赤い羽根共同募金運動が始まったことを受けて、中央共同募金会会長と厚生労働大臣のメッセージ伝達式が市役所で行われました。運動期間は12月31日まで。寄せられた募金は、地域のボランティア活動や福祉活動などに役立てられます。



手話で気持ちを伝える体験を 紙屋小学校で手話学習の授業を開催

9月25日と26日に紙屋小学校で手話学習の授業がありました。市独自の教科「こすもす科」で小学3・5年生と中学3年生が取り組む手話学習の一貫で行われたもの。当日は小林手話通訳者派遣協会の会員を講師に迎え、同校の3年生と5年生17人が手話を使った簡単なあいさつや曲の歌詞を手話で表現する方法などについて学びました。



天里 新さん(3年)は「手話を使った歌など、楽しみながら手話を覚えることができた。教えてもらった手話を使ってあいさつしたい」と話しました

絶品うまいもん甲子園九州大会で 秀峰高校生考案メニューが最優秀賞

8月に開かれた「ご当地!絶品うまいもん甲子園九州エリア大会」で、小林秀峰高3年黒木聖斗さん(写真㊟)、川野楓馬さん(写真㊟)考案の「秀南チキンシュウ!!」が最優秀賞を獲得しました。大会は高校生がご当地食材を使った料理を考案・発表するもの。2人は今後さらにメニューを改良し、11月に開催される全国大会優勝を目指します。



2人は、スイーツのような感覚で軽く食べれるようにシュー生地にはチキン南蛮を挟んだメニューを考案。隠し味として大葉を入れ、後味もあっさりです

市の子育て支援事業を長年支える 村岡みくさんが知事表彰を受賞

9月23日、宮崎市で「ひなたの出逢い・子育て応援運動推進大会」が開催されました。大会では、出会いや子育てに関する応援などに熱心に取り組む個人や団体を表彰する「みやざき出逢い・子育て応援表彰式」が行われ、小林市ファミリー・サポート・センター「虹」アドバイザーの村岡みくさん(真方)が知事表彰を受けました。



村岡さんは、同センターで活動し通算12年目。自身の保育士や介護職での経験を生かした献身的な相談対応などが評価されました

小林の秋の味覚「須木栗」を求めて すきむらんどで栗まつり開催

9月22日と23日、すきむらんどで栗まつりが開催されました。会場では「須木栗」や焼き栗、栗を使ったスイーツ、地元特産品などを販売。昼夜の寒暖差が大きい須木の山あいでも育った「須木栗」は、大粒で甘みが強く、県を代表するブランド栗の一つで、市内外から訪れた多くの人が旬の味覚を求めて行列を作りました。



鹿児島市から来場した中村 誠さんは「栗のジェラートの、濃厚な栗の風味に驚いた。知り合いにもぜひおすすめしたい」と話していました

すべての人が自分らしく暮らすために 権利擁護の啓発イベント開催

9月20日、中核機関にしもろ地区権利擁護推進センターつなごの啓発イベントが開かれました。「住み慣れた西諸で、すべての人が『自分らしく暮らすために』」をテーマに、萩・山口法律事務所の山口正之さんを講師に迎えた基調講演や障がいがある人やその家族への支援の実践報告、福祉作業所で作られたお菓子の販売などが行われました。



参加した市民や福祉関係者243人は講演などを通して高齢者や認知症、障がいのある人やその家族などを守るための制度について理解を深めました

地域連携で認知症を支援 市内2地区でチームオレンジ発足

認知症の人やその家族を地域で支援するチームオレンジが新たに市内2地区で誕生しました。9月21日には芹川・巢之浦地区で、10月2日には水流迫地区で発足。それぞれの地域で発足式があり、立ち上げの経緯や今後の活動などについて確認が行われました。発足はこれで市内5地区。今後は地域ごとに特色ある支援活動が進められます。



芹川・巢之浦地区代表の橋口勇蔵さんは「認知症本人はもちろんのこと家族も支えることができるような活動も行っていきたい」と意気込みました

手作りロケットが空高く飛び 小林小でロケット教室を開催

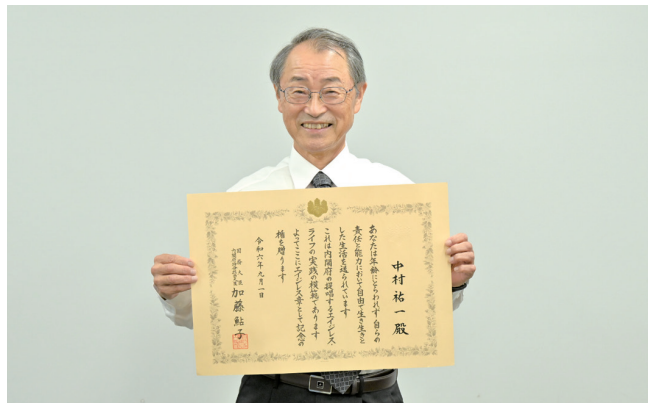
10月5日、小林小学校でロケット教室が開催されました。ロケット開発を手がける北海道の植松電機と連携する団体、RISE（柴田えみ代表）を講師に招き開いたもので、家庭教育学級と小林小校区まちづくり協議会が協働で企画。参加した児童23人は本物のロケットと同じ仕組みで飛ぶ紙製のロケットの組み立てと打ち上げを行いました。



参加した草野 奏さん（4年）は「一から自分の手で作ったロケットがミサイルみたいに早く、高く飛んでいてすごかった」と驚きを語りました

生き生きとした生活で地域元気に 中村さんエイジレス章に選ばれる

内閣府が年齢にとらわれず自由に生き生きとした人生を送っている高齢者に贈るエイジレス章（エイジレス・ライフ実践事例）に中村祐一さん（南西方）が選ばれ、10月9日に県庁で伝達式が行われました。中村さんは地域のサロン団体やボランティア団体で高齢者が「気軽に」「無理なく」「楽しく」参加できるさまざまな支援活動を行っています。



中村さんは「受章とともに活動する仲間たちのおかげ。これからもみんなで、無理なく、楽しく、いきいきとした活動を続けていきたい」と話しました

平和への思いを新たに 戦没者追悼式を文化会館で開催

10月4日、戦没者追悼式が文化会館で行われました。遺族など約420人が参列し、緑ヶ丘公園の忠霊塔にまつられている戦没者約1600人への、平和を祈りました。遺族を代表して遺族協会の橋満進 会長が「終戦から79年。これからも先の大戦について語り継ぐことが私たちに課せられた義務である」と思いを語りました。



式では「平和への思い」をテーマに募集した作文で最優秀賞に選ばれた、種子田 亜優さん（南小6年）と木場美怜さん（野尻中2年）の作文朗読も行われました

2027年の北海道全共を見据えて 第65回県畜産共進会を開催

10月4日、新富町の児湯地域家畜市場で第65回県畜産共進会の肉用種種牛の部が開催されました。当日はJ A地区本部と畜連計7団体から63頭が出場しました。小林市からは5出品者から7頭が出場。県内地域を勝ち上がってきた各地域の代表牛が月齢別など3部門で、発育状況や体格の仕上がりなどを競い合いました。



県内畜産業をけん引する市内の和牛関係者らは、2027年8月に北海道で開催される第13回全国和牛能力共進会に向けて今後も品質向上に取り組みます

小林中深江さんが全国大会で優勝 日本最高峰のダンスコンテストへ

10月2日、鹿児島を拠点に活動するダンスチームに所属する深江遥斗さん（小林中2年）が9月に開催された「ALL JAPAN CHALLENGE CUP 2024」での優勝を市長に報告しました。この優勝で深江さんは来年3月開催の日本最高峰のダンスコンテスト「ALL JAPAN SUPER KIDS DANCE CONTEST 2024」への出場権を獲得しました。



深江さんは「前回、全国のレベルの高さを感じた、この日本で一番大きい大会への出場はうれしい。3人でかまして優勝したい」と意気込みました

小林の未来を担う子どもたちへ 坂口建設(株)と(株)三共がランドセル寄贈

10月3日、坂口建設株式会社（松岡重孝代表取締役）と株式会社三共（外村公明代表取締役）からランドセル4つが寄贈されました。さまざまな理由で生活が厳しいと感じている世帯へランドセルを贈ろうと平成28年から続く取り組みで、今年で9回目。ランドセルは支援団体などを通じて来春から小学校に通う子どもたちに届けられます。



松岡代表は「実際に喜んでもらえているという話を聞き、私たちもうれしい思い。今後も継続した取り組みができるよう頑張りたい」と話しました

災害に強い地域づくりを目指して 永田町区で防災訓練を実施

9月29日、永田町区内全域で防災訓練が行われました。訓練には、同区内の地域住民や消防団など約150人が参加。震度6強の地震が発生したことを想定し、各地区に設定された3カ所の一時避難所から訓練本部まで歩いて避難する防災ウォーキングや大雨災害時などに危険となる箇所を確認作業、消火器体験などが行われました。



永田町区の小峰雄二区長は「これまで行ってきた図上訓練に加え、実際の避難行動を行う訓練を行うことで災害に強い地域づくりが進む」と話しました

西諸の教育振興に多大なる貢献 株式会社ミヤザキが紺綬褒章を受章

西諸2市1町の教育振興のため多額の寄付を行った株式会社ミヤザキ（山之上道廣代表取締役）が国から紺綬褒章を授与され、10月2日に伝達式を行いました。同社は、令和4年度に各市町へ1億800万円（本市へは6,300万円）を寄付。各小・中学校の要望に応じて備品や図書購入などに充てられ、教育環境の充実に役立てられました。



本市出身の山之上代表は「地元へ貢献したいと強く思っていた。子どもたちには立派な社会人になって、地域に貢献してもらえたら」と話していました